



TITLE:

若年者直腸癌の2例

AUTHOR(S):

森, 和夫; 河端, 修一

CITATION:

森, 和夫 ...[et al]. 若年者直腸癌の2例. 日本外科宝函 1958, 27(1): 279-280

ISSUE DATE:

1958-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206571>

RIGHT:

3) 巨大濾胞性リンパ腫はこれまで良性と考えられていたが、他の悪性リンパ腫に比べると長い経過をとるとはいえ、なお悪性であることが今日知られている。

(本稿の要旨は昭和32年4月20日、第88回大阪外科集談会において発表した。

稿を終るにあたり、終始御懇篤な御指導と御校閲を賜わった恩師白羽教授に深謝し、あわせて病理組織学的検査において有益な御教示と御助言をいただいた和歌山県立医科大学病理学教室新井教授ならびに三重県立大学医学部病理学教室武田教授および伊豆津助手に厚く御礼を申上げる。また臨床上に御親切な御指導と御助言とをあたえられた前古座川病院長、現大阪市

立日本橋市民病院長宮岡邁博士にも深甚なる謝意を表する。)

参考文献

- 1) 関口蕃樹: 外科臨床余瀝152, 昭17, 金原書店.
- 2) Willis, R. A.: Pathology of Tumors 760, 1948, Butterworth & Co. (Publishers) LTD..
- 3) Anderson: Pathology 2nd Ed. 940, 1953, The C. V. Mosby Co..
- 4) 萩原義雄: 日本外科全書, 金原・南江堂, 21, 86, 昭29.
- 5) V. Domarus, A.: Grundriss d. inneren Medizin Julius-Springer. 22 Anfl., 329, 1957.
- 6) Gall, E. A., et al.: Am. J. Pathol. 18, 381, 1942.
- 7) 石野琢二郎: 日外宝, 20, 120, 昭18.
- 8) 石野琢二郎: 日外会誌, 44, 688, 昭18.
- 9) 高橋幹夫ほか: 日臨外誌, 13, 24, 昭26.
- 10) 永井幹雄: 共済医報, 1, 69, 昭27.

若年者直腸癌の2例

京都大学医学部外科学第2講座(指導 青柳安誠教授)

森 和 夫 ・ 河 端 修 一

(原稿受付: 昭和32年6月15日)

CANCER OF THE RECTUM IN YOUTH REPORT OF TWO CASES

by

KAZUO MORI and SYU-ICHI KAWABATA

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director: Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

We examined two patients who were suffering from cancer of the rectum: one was a boy aged 16 and the other was a girl aged 13.

The boy's case was once diagnosed as polyp of the rectum in a certain hospital about two years ago. This time, however, our histological examination revealed that the rectal polyp had become adenocarcinoma.

We found so many swollen lymphatic glands along a. haemorrhoidalis superior and in the mesosigmoid that we only made an anus iliacus instead of amputatio recti.

The girl's case was colloid carcinoma and it had grown into size of a fist during the past two years. In this case we could carry out amputatio recti abdominoperinealis.

我々は最近、16才の少年及び13才の少女の直腸癌を経験したのでここに報告する。

症例Ⅰ 16才の少年

約2年前から時々排便時糞便に血液の附着すること

を認めている。約3ヵ月前から下痢を来す様になった。排便痛は無く糞柱が細小になったことも無い。約1年前直腸ポリープの診断を受けて、手術をすすめられたが放置していた。結核、性病、赤痢、更に日本住血吸虫症等に罹患した過去歴は無い。

腹部には異常所見を認めないが、肛門内指診によつて肛門から約5cmの深部に、腫瘤の下端をふれる。腫瘍は直腸の全周をとりまきために直腸は狭窄状を呈しているが、なおその内腔に指を通ずることが出来る。直腸鏡検査により、直腸後壁に潰瘍を証明、この潰瘍部から試験切片をとり検すると Adenocarcinom なることが判明した。即ち粘膜面より連続的に腺癌の構造をとつた細胞が入り込んでおり、原発巣が直腸と思われる組織所見を示した。経肛門レントゲン検査に於ても著明な狭窄を認める。

手術所見：左のPararektaler Schnittで開腹、腹腔内には血性の腹水少量を認め、腫瘍と周囲との癒着はさほど著明でないが、直腸附近及びS字状結腸腸管膜内リンパ節は米粒大から拇指頭大に至るまで多数腫脹。肝への転移は認められないが、根治手術は到底不可能と考え人為肛門の造設に止めた。

症例Ⅱ 13才の少女

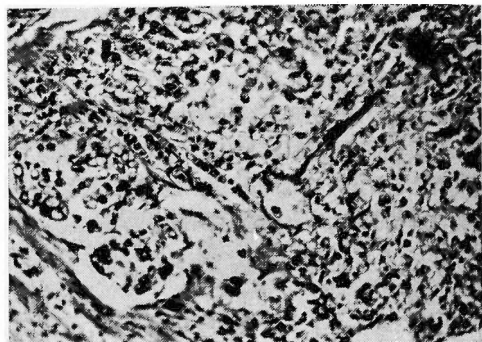
約6年前から排便時軽度の出血を認めていた。約2年前痔瘻の診断を受けたが排便痛が無いため放置。ところが約2ヵ月前から下痢を来し、裏急後重を伴い糞柱は細小となつた。過去歴に特記すべきものは無い。

下腹部に兎糞状の腫瘤をふれる他は肝を触知しないし、鼠蹊部リンパ節の腫脹も認めない。肛門内指診で約2cmの深部に腫瘍の下端がふれ、且つ腫瘍は直腸の全周にわたつておるために指を通じ得ない。挿入した指頭には血液及び粘液の附着を認める。経肛門レ線検査により狭窄範囲は約5cmなることが判明した。

手術所見：約2週間前に人為肛門を設置し下正中切開により開腹。腹水少量を認め、腫瘍は腹膜の Umschlagsstelle に及び子宮後壁と強く癒着し、その可動性は殆んど消失している。上痔動脈に沿うて小指頭大のリンパ節腫脹を数個認める他、更に廻盲部の腸管膜中にも硬い拇指頭大の腫脹を認めた。之を採つて氷結法により迅速標本を作製して検すると、癌転移の所見を認めず、また肝にも転移を認めぬため腹会陰式直腸切断術を行つた。子宮後壁との癒着の剝離は困難で、その途中腔後壁を損傷し、ために腔成形手術を必要としたが、術後の経過は良好で創は第一期癒合。剔出した腫瘍は手拳大で直腸の全周をとりまき、大きな噴火

口状潰瘍を認めた。

組織学的には H・E 染色で典型的な膠様癌 (Gallertkrebs) の像を呈している。即ち粘液変性を来した細胞多数を認め、且つ癌細胞がこの粘液変性を来せるために生じたと思われる壊死部を認め、この所見からすると Carcinoma simplex の範疇に入るものと思わ



H・E 染色 ×150

れる。驗拡大で細胞は印環状構造をとり、粘液と思われる物質が細胞内及び細胞間に出現する像がみられる。ムチカルミン及び PAS 染色により癌細胞は強く陽性に染色された。

考 察

名古屋大学の加藤は300余例の統計的観察から、全直腸癌患者中30才以下の若干者の占める率は6.0%と称している。彼の場合最低年齢者は20才の男子であつた。

東大の山田は10才の少女の直腸ポリープを切除検鏡すると、その一部に前癌状態を認めたといひ、阪大の久留はS字状結腸下部の単発性ポリープが、1年8ヵ月後には結腸の内腔を完全にとりかこむ大なる癌に変化していた症例を述べているが、我々の第一症例も1年前、権威ある病院にて直腸ポリープの診断をうけており、やはりポリープが癌発生母地となつたものと考えられる。

第2症例は約2年前本院外来にて痔瘻の診断をうけており、癌発生はその後とみてよく僅かの期間に著明な発育を来したものと考えられる。若年者の癌は大多数が膠様癌と称せられているが、本症例も亦同様の組織像を示した。

文 献

- 1) 古賀秀夫：直腸癌，医学，9, 93, 昭29.
- 2) 久留勝：直腸癌，臨床の進歩，昭29.
- 3) Mac Callum: Tumor of rectum, Textbook of pathology, 59, 1942.